

■■ 山の一家 ■■

一

わが国の農業が、山からだんだんと平地に降って来たように、人間の生活も山から里を目指しつつあった。

山を捨てて一度平地に降り、あるいはそこにひらけた都市の生活に馴れて来ると、山が生活の故郷であることなどはいつか忘れてしまい、ふり返って仰いただけでもすでに屈託を感じる。したがってなおそこに生活の本拠をおく人々を、何か別の人種か種族でもある如くみようとする。しかもそれが専門—というような—肩書を持った人々においてそうであるから少しく情けない。

山がわれわれの生活の故郷であれば、そこにはなおわれわれの過去の生活を識るさまざまな生きた資料が残されたいはずである。それと同時に、人の気持ちなども、平地では想像も出来ぬようなものがある。人間が孤独を嫌って、一図に、何かな類を求めて集まろうとする反面に、あえて孤独を求めて、そこに隠れようとした心理なども、今の我々の血の中にも幽に流れているのだが、それを考えるには、もう平地生活を基礎とした思索では企及し得ない。どうしても山に求める以外には方途はなかったのである。そうしてこの日本内地にもまだまだ山深いところがあり、それを求めることはまったく絶望ではないのである。

二

源を諏訪湖に発した天竜川が、伊那の峡谷を南に走って信三遠の国境地帯を穿つ一帯の地域は、わが国でも有数の山地で、そうしてかつての大森林地帯であった。いまでこそ天竜の峡谷を縦貫して鉄道が通じたりして、山肌も露わにされたが、つい四、五〇年前までは、原生林そのままという山も過大でないほど鬱蒼とした大樹林に覆われていた。明治三〇年に王子製紙会社がはじめて遠江の中部にパルプ工場を興したのも、この一帯の森林をあて込んだもので、爾来年と共に山は露わにされた。

そうした山地ではあったが、早くからこの地を目がけて入り込んだ者も少なくなかったらしく、足利時代にすでに尾張から角伝という山伏の一党が、七十余人の同勢で入り込み、ここから大井川の上流寸又川の源へ越す戸中山の山中に居を構えていた。今でも戸中山御料林中に長者屋敷の址と称えて、幾つかの礎石の類が遺っている。そんなわけで附近の山村にはその記録や逸事を伝えた家も何軒かある。

寛政一〇年〔一七九八〕の春に京都で版行された『遠山奇談』四巻は、この森林地帯を世に公にした最初の記録である。一説にはあの本はまったくのでたらめでであるとの批評

もあり、事実何丈もある大蛇が出て来たり、一間もの蝦蟆が据わっていたり、三尺もの黄金の弊帛が密林中に立っていたりするが、そうした事柄をもって、その他の悉くを虚誕と断ずるのは少しく早計である。そもそもあの書物の出来た由来というのが、寛政八年京都大火の際に類焼の厄に遇った東本願寺の再建からはじまるのである。当時材料にする櫂の巨木を全国的に索めたがもうない。過ぐる明暦の建築には富士の裾野一帯の森林にそれを仰いだがここにももう得られない。そういう際に偶然の機縁からこの地帯のことを聞き出した浜松の末派の僧が、同勢七人で調査に入り込んだ。その際の報告によって、さらに京都からも人が来て本格的な調査をした。そのおりの言わば探検の又聞きである。したがって当時としてはある程度の誇張も止むを得ない。いかに山深いかは柳里恭の『雲萍雑誌』等で有名な遠江の京丸のさらにさらに奥地をなすのでも想像されよう。

私はある事情でこの遠山一帯の山地を約一〇年に亘って次々に跋涉し、山の中に村を訪ね家を探していた関係で、目も遙かな山の嶺や谷の底に、一軒あるいは二軒ぐらい、ほとんど隣もないような処に居を構えて、世間とは没交渉に暮らしていた人々にも何十人が接していた。そうしたわけで平地ではもう想像も出来ぬような生活が、まだ繰り返されていた事実も現実に見ている。この譚もその一つであって、その昔にそこに入り込んだ山伏や落人の生活を現実に想わすものが少なくない。そうして平地を捨てて山の中に入った人々の心理なども、こういう人々の生活からつぶさに見てゆかぬと永久に解く道はなかったように思う。

遠江の北西の端である水窪町から天竜川を横切って秋葉善光寺路というのを斜めに信濃にはいると、そこに地蔵峠というのがあつた。この地蔵峠の西の山中に、隣といつても一里も林を分けねばならぬようなところに、まったく孤立の生活を営んでいた人物があつた。しかもその人物が、昭和五、六年の頃、多くの農村が、不況のどん底に喘いでいた際に、万円近い現金を貯えて、付近の村々に金の融通をしていた。名をいうのはこの際憚るが、土地の人々には直ぐあれかと合点がゆくほど有名である。昭和七年の夏に私もその家を訪れたことがあるが、柚、木樵の通る山路から、さらに反り返るほどの山坂を登った西向きの斜面に、ほんとに名ばかりの萱の家を結んでいた。これが付近数里を通じて一番の金持ちだとは、いかにしても考えられない。その構えは何一つ取り立てて言うほどの特色はない

炭焼小屋同然であるが、ただ一つ土地のいわゆるハナノキすおう（蘇芳の一種）を一株家の前に植えて、そうしてあたりに蜜蜂の箱が何十というほどおいてあつた。あいにく本人は不在で、どういう目的でそこに本拠を構えたかは直接に聞くことが出来なかつた。

本来は近くの村の出生であるが、かれこれ五〇年も前に、村の物持ちの娘と恋愛問題を起した。ところが身分が違うとの理由で親の承認が得られぬままに、娘と二人で土地を出奔した。それから数々の苦勞も経験したであろうが、ともかく下野の那須の開墾地に入って、そこで暫く開墾に従事し子供も生まれた。しかし開墾地の生活もかならずしもよくなかった。そんな事情でそこにも見切りをつけ、ほとんど着のみ着のままで村に還って来た。

村に還っては来たが再び村人にはならなかった。それには前々の事情もあったであろうが、別に何か期するところがあったと見え、里からはまったく離れたこの山中に家を結んだのである。そうして四〇年近くそこに棲んで、ともかくも村一番の現金持ちと成ったのである。

いかなる方法で金を作りかつ貯えたかはにわかに想像の限りでないが、近間の山を拓り開いて畑を作り、その一方椎茸の栽培採集を盛んに行ったのは事実である。そうして夏分は蜜蜂を養って、それを次々に増やしたりした。椎茸はもちろんのこと、蜜蜂にしてもそうであるが、山が深いだけに、里の人々が想像も及ばぬほど儲かった。法律で所有権や利用権が確率したといっても、交通その他の関係でその限度は知れている。早い話が、図面の上でいかに所有権が確保されていても、他に利用するものがなければその朽木に生えた茸の類も、これを発見し採取する者の自由である。つまりはそこには原始時代がそのままに遺っていたのである。蜜蜂を飼うにしてもそうで、あの蜂が求める花の蜜に対して、所有権を主張しこれを拒むまでには、法律はまだ徹底し得ないのである。しかも山中のことで、春を迎えてから秋にかけて、山には種々の花が咲き乱れ、これを利用するものに委せていたのである。

こうして他人の想像もせぬところに目をつけて、その資源の開拓を志したところは確かに一見識であった。当時この附近の山村では、椎茸や蜜蜂はほんの片手間の仕事で、これを営利的に利用する等は、考える者すらなかった。定石通に農業専一に志して、皆人そこに肝胆を打ち込んで争っていたのである。しかも山中の一つ家であるから、生活的に不便も多い代りに、いったん懐にした金は、ほとんど支出ということがなくてすんだのである。もちろんそれには本人の勤勉と貯蓄心が一倍旺盛であったことは争われぬところで、それを物語る逸話も数々知られている。その上最初から山に住んだのでなく、広く世間を渡って来ただけに、得た金を有利に廻す方法にもよく通じていた。実はこの男に限らず村の物持ち旧家として、世間から仰がれるような家もかつてはそうした勤勉や頭脳の働きで、地位をかち得た者も少なくない。

この老人の家から、さらに峠を二つばかり越してこれもひどい山中に、たった一人で暮らしていた人物がある。おそらくこれも山の生活者の最後の人かと思うが、今ではさすがに老いそぼれて、最近はまだ一人の身寄りの者に、引き取られて去ったと聞いた。しかしそこで老病を養いながらも、しきりに山の家を恋しがって、健康が回復したら、是非とも還って、永い間丹精した植木や畑の始末をつけたいと言っているそうである。

生まれたのはそこから二里ばかり離れたちょっとした宿場であった。生家というのが旧弊な村人からとかくの噂をされる家柄であった。そんなことであつたらう、明治の初年に同志三人と語らって、この山中に新百姓の村を創るべく開墾をはじめた。山の中のことはあり、当時は土地問題等も一向面倒はなかったのである。最初の抱負はかなり大きくかつ熱烈であつたらしいが、新百姓の村の開設も地理と事情を考えぬ限り実は容易でなかった。この点今の開拓村などとは、比較にもならぬ困難を嘗めつくしたのである。それで他の二人は次々に山を降ってしまい、老人一人が取り残されたのである。名前を明かすと木村利八といい、女房も持って子供も三人あつたが、成人につれて次々に山を出て行った。そうして晩年は女房にも死別して、まったく孤独に堕ちていた。最近身柄を引き取られるまで四十何年の長い歳月をそこで送ったのであるから、ずいぶんと辛抱強い話である。この頃の人たちなら、たちまち苦心談などと吹聴するところかもしれぬが、黙っているところに、何かしら尊いものを感じず。ことの成功とか、そういう事柄とは別である。

この老人が四十数年の山中孤独に堪え得た理由は、実は老人自身にもはっきりとは説明出来ぬかも知れない。考えようではいかようにも解釈はされるところで、結果からいえば、鉄のごとく意志とも言えぬことはないが、この頃の軽薄な伝説作者でもあるまいし、しかく簡単にきめるわけにもゆくまい。

木村老人が山中孤独の生活に堪え得たことには、前に述べた人物のように利欲の蓄積ではなかった。一言に尽くせば自らの生活環境を開いたとも言えるであろう。その一つに挙げられるのは手に桶職という特殊の技術を持っていたこと、それと今一つは、生家が徳川時代のいわゆる不浄役人であつた関係もあつて、武術の、ことに弓道に嗜みの深かつたことである。そうしてこれも何かの影響かと思うが、いわゆる盆栽の類にただの山人とは異なつた感覚をもつていた。どのみち大したものでないにしても、いわゆる趣味を解する道を知つていた。

そんなわけで、広い何人も気づかぬような深山を悉く跋涉して、いわゆる珍草異木を発見して、これを手塩にかけ一方には、おそろしく古い榎さわらだのあららぎなどを発見して、

それを桶材にこっそり利用する。これも実情を識らぬと充分に理解出来ぬことだが、あの地方の山中には、あららぎの古木が、どういうわけか一株だけあって、これが山の主であると言われている。当人がひそかに人に語ったところによると、大沼という山にあった一株などは、樹齢がほぼ八百年に及ぶもので、老人が長い間少しずつ伐って材に取ったという。その材から作った桶や飯櫃が、今も付近の村に使われている。

屋敷の脇に矢場を設けて、ときおりそこに出て弓の習練もやっていた。それで近間の村の祭典等に射的があるとかならず出かけてゆく。で、今でもそれらの村々の神社の拝殿に、この男の上げた金的の額が幾つか掛っている。

こうしたことばかり言うと、いかにも山中閑日月ありで床しい感じさえするが、実際は他で想像するように気楽なものではなかったと思う節もだんだんある。しかし、前の老人のように産はなさぬだけである意味では正に山の生活のほんとの実践者であった。

かような孤独な歳月を送っておれば、定めし人懐かしい性格の持主であろうと想像するのは人情であるが、その点は逆で、無口で無愛想である上に、ことに山仕事などにゆく女たちには何かと辛くあたった。それで老人の家近くなど通行して畑の畔でも踏もうものなら、その怒り方も尋常でない。私が訪れた折にも、近くの山に炭焼が始まって、女たちが毎日炭を負って近所を通行するのを酷く嫌って、麦畑の一端にさながら猪の柵のように、幾日も費やして頑丈な垣根を結っていた。他人のことなど何の頓着もないのである。あるいはこういうところが山の人々の持つ特有の性格であったかも知れない。それというのが、かような性格の持ち主でないかぎり、山中孤独の生活には堪え得なかったと思われる。

この話などは要するにほんの一端にすぎぬが、なお何とか肯かれる節がある。山中に孤独の生活を送ったことには、性格的には特異の点があるには違いないが、それだけの理由ではないであろう。そうして平地人の生活にも当てはめられる多くのものがある。したがってこれを特殊な事例として取り扱ったのでは意味はない。私がこの話を持ち出した目的もまたそこにあるので、早い話が今の農村や山村にしても、これを都市生活に比較すれば、刺戟の希薄な点是一種の孤独生活であった。かれこれ願うと、この二人の生活も、今のわれらにとって、かならずしも他山の石ではなかったのである。